



# サリーの帰る家

オハラ作 もりうちすみこ訳 さ・え・ら書房

読書好きなサリーは十三歳。「夢見るサリー」と呼ばれても、家事をしなくてすむのならいいと思うくらい、家事が嫌い。家族と一緒に、豊かではないけれど、しあわせに暮らしていた。ところが、一家を支えていた父親が急になくなり、サリーと妹のケイティは働きに出ることになった。「雇われ人の市」に行き、住み込みで働く農場を探すのだ。

十九世紀後半のアイランド島を舞台に、一人の少女が故郷を離れ、働きに出ることを通して、成長する姿を描いた物語。

